

Prajñākaragupta における言葉の意味論

裴 慶 娥

1. 言葉の対象は何かについて、Dignāga は他者の排除 (anyāpoha) という普遍概念と考えるが、Kumāriila はそれを批判して実在する普遍 (sāmānya) が言葉によって肯定的に表示されるという。これに対して、Dharmakīrti は因果性によって言葉は実在と間接的に結びつけられるが、直接的には他者の排除を本質とする概念を対象とするという。

Dharmottara は、結果を生じる能力によって原因である対象が区別される¹⁾と述べ、言葉の対象は概念知の形象として仮に仮託された (samāropita) 他の排除 (anyavyāvṛtti) であるという。彼にとって、言葉は他の排除を対象とする限り、結果を生じる能力によって区別される外界の実在を間接的に表現するということになる。この点においては彼は Dharmakīrti を受け継いでいる。

これに対して Prajñākaragupta は認識原因である対象の区別は、その対象の鮮明性によって決定され、その鮮明性に差異がある場合、その対象に同一性はないと述べる。すなわち、鮮明性の差異によって独自相と一般相を明確に区別することにより、独自相を対象とする直接知覚と言葉によって一般相を認識する概念知の役割を確実に区分したのである。それ故に、彼にとって、言葉の対象は鮮明に顕現する感官の対象ではありえない。この立場は仏教認識論理学派のアポーハ論において同じであるが、ここで注目すべきことは、Dharmakīrti を始めとして Dharmottara などが実在の持つ因果効力にもとづいて言葉と外界の実在との間接的な結びつきを認めるのに対して、Prajñākaragupta は言葉の対象を普遍概念として強調することである。このような流れの中で Prajñākaragupta は言葉の対象について具体的にどのような解釈をし、それは如何なる意味を持つのかを考察することが本論文の目的である。

2. Prajñākaragupta は、独自相 (svalakṣaṇa) は感官知の対象であって、言語契約 (saṅketa) が適用されないから、言葉が独自相を表示すること (vācakatā) はないと述べる。その根拠は刹那の存在である独自相が空間的時間的に随伴しないことで

ある。言語契約 (saṅketa) は空間的・時間的に別のところでの言語活動 (vyavahāra) を可能にするためのものである。それ故に、Prajñākaragupta は独自相は言葉の対象ではないと結論づける²⁾。

このことは認識や言葉の対象として外界の対象を認めない Dignāga のみならず、Dharmakīrti にとっても同様である。例えば、Dharmakīrti も感官知 (indriyajāmatih) はすべて特殊 (viśeṣa) のみを対象とし、特殊は言葉に随伴しないので言葉が用いられる可能性はないと断言する³⁾。

ところが、Dharmakīrti にとって概念知は、言葉によって、直接的には一般相を、間接的には独自相を対象とするのであり、その存在論的・因果論的根拠がまさに独自相の持つ結果を生じる能力であると言える。

これに比べて、Prajñākaragupta は、独自相 (svalakṣaṇa) は全く言葉と結びつけられないと述べる⁴⁾。すなわち、「これ(言葉)はこれ(対象)の表示者であり、これ(対象)はこれ(言葉)の被表示者である」というふうに言葉と対象の両者を関係づける知に顕現する場合、まさにその両者のあいだには表示者と被表示者の特徴をもつ関係が成立し、その両者を関係づける知は分別知であるので、その対象は感官の対象ではない⁵⁾。

Prajñākaragupta はここで感官の対象が分別知の対象にならないことに関して次のように述べる。

実に、感官の対象であるものは鮮明に顕現するものであり、また[感官の認識領域を超えている]本質的に知覚不可能なもの(viprakṛṣṭa)には不鮮明な顕現がある。そして顕現に区別がある場合には同一性(ekatā)はない⁶⁾。

Yamāri によれば、この内容は、再認識の際に概念知に顕現する対象に言語契約をなすという有分別知論者の見解に対する答えである⁷⁾。すなわち、概念知に不鮮明に顕現し、直接知覚に鮮明に顕現する対象が概念知に同時に顕現することはありませんのであり、このように顕現に区別があれば対象にも区別があってその二つの対象に同一性はない、という意味である。

これに対して Dharmottara は、対象を因果的効力を持つものとして把握するから誤りはない、という意味で次のように反論する⁸⁾。

近くにあるものか遠くにあるものかによって、知には鮮明な顕現と不鮮明な顕現の差異があるとしても、対象自体は一つであるから、どうして顕現の差異によって[対象を]区別するのか。というのも、結果を生じる能力(arthakriyā)の差異によって[対象を]区別するからである⁹⁾。

ここで Dharmottara は、Prajñākaragupta が言及した鮮明な「感官の対象」と不鮮明な「本質的に知覚不可能なもの (viprakṛṣṭa)」を、「近くにあるもの」と「遠くにあるもの」と言い換える¹⁰⁾。すなわち、空間的・時間的に随伴しなくて、本質的に種類が異なるものは知覚できないものであるという意味を、遠近の意味に限定することによって感官知の対象と概念知の対象を明確に区分することなく、言葉によって、直接的にせよ、間接的にせよ、同一の対象として概念知に把握されるものであると意図していると考えられる。というのも、Dharmottara にとって、言葉は外界実在に属する「他の排除」が仮託された概念知の形象を表示し、その結果、概念作用は外界の実在に触れる¹¹⁾ からである。それ故に、鮮明・不鮮明に関係なく、言葉の表示対象としての同一性が必要であったのである。

これに対して Dharmottara を批判する際に、Prajñākaragupta が注目したのは、結果を生じる能力 (arthakriyā) の差異によって対象を区別するという点である。なぜならば、原因と異なる結果による区別は原因を区別する特徴を持たないからであり、結果の区別によって原因の区別があるならば、無限に結果が必要であることになってしまうからであり、また鮮明に顕現するものが結果を生じる能力をなすから、結果を生じる能力の差異によって区別があっても、まさにその顕現の差異が区別することになるからである。したがって、彼にとって遠いところにあるものの不鮮明な顕現は実在を対象としないのである¹²⁾。

要するに、言葉の対象が独自相か一般相かについて、顕現の差異によってではなく結果を生じる能力によって区別することはできない。同じ土から壺と皿が作られたり、一つの薬が解熱効果など二つ以上の効果を持ったりするからである。すなわち、結果が異なっても原因が同じである場合があるからである。Prajñākaragupta はこのように鮮明な対象と不鮮明な対象の同一性を否定することによって言葉の表示する対象と感官の対象を明確に区分したのである。しかし、そうだとしても Prajñākaragupta が効果的作用を否定したわけではない。

3. Dharmakīrti は結果を生じる能力 (arthakriyāśakti) のある独自相が自己に類似する瞬間を次々と生じ、独自相の知覚に後続する概念知によって一つの個物として捉えられるという¹³⁾ 一連の因果関係によって独自相から概念知までの認識機能を説明するが、彼にとっても、一つの因果効力を持ち、勝義的存在である独自相と目的を達成する能力を持ち、世俗的存在である一般相は区別され、独自相は感官の対象であって、言葉によって表示され得ない。

Prajñākaragupta はこのような問題を解決するために独自相の持つ因果効力を普

遍的機能と特殊的機能とに区別したと考えられる¹⁴⁾。すなわち、普遍的にせよ、特殊的にせよ、「壺」や「色」などの語は、それらが持つ因果効力を意味し、それらに対して「比喩的に」用いられるのである¹⁵⁾。それ故に、その言葉の対象を勝義的に実在するものとして考える必要はない。

要するに、Dharmakīrti と Dharmottara は一つの認識対象 (prameya) に対して直接知覚と概念知という二つの認識機能があるという立場であり、Prajñākaragupta は独自相と一般相という二つの認識対象 (prameya) に対して直接知覚と概念知という二つの認識機能があるという立場である。それ故に、Prajñākaragupta にとっては、言葉によって表示される対象を認識する概念知が言葉によって表示され得ない感官知の対象を認識することはない、ということが強調される。すなわち、彼は、分別を「名称や種などを結びつけること」¹⁶⁾ と定義する際に言葉の対象として外界の対象を想定しない Dignāga を受け継いだように、言葉の意味としての他の排除を外界の知覚対象を想定せずに解釈しようとしたのである。

-
- 1) PVA 247, 30. 2) PVA 246, 24-31. 3) PV kk.127-128 ; PVin 16, 10.
 4) PVA 246, 24-31. 5) PVA 247, 21-28. 6) PVA 247, 28ff. 7) Y (P 214a1-4 : D 159a7-159b2)
 8) Y (P 214a4 : D 159b2) 9) PVA 247, 30.
 10) 小野基 (1995) 「仏教論理学派の一系譜—プラジュニャーカラグプタとその後継者たち—」『哲学・思想論集』21, 筑波大学 159-158 によれば、これは Dharmottara 固有の解釈である。 11) 赤松明彦 (1984) 「Dharmottara の Apoha 論再考 — Jñānaśrīmitra の批判から—」『印度学仏教学研究』33-1, (77) 参照。 12) PVA 248, 1-8. 13) 桂紹隆 (2002) 「存在とは何か—ダルマキールティの視点—」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第 41 集, 21-22 参照。 14) 神子上恵生 (1978b) 「物にそなわる普遍的機能 (Sāmānyā śakti) と特殊的機能 (Pratīnyatā śakti)」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』17, 1-15 参照。 15) 桂 (2002) 23 参照。 16) PS 2, 9.

〈略号〉

PV = *Pramāṇavārtika-kārikā* (Dharmakīrti) : Miyasaka Yūsho ed. *Acta Indologica* 2, 1972.

PVA = *Pramāṇavārtikālaṅkāra* (Prajñākaragupta) : Rāhula Sāṅkrītyāyana ed. Patna 1953.

PS = *Pramāṇasamuccaya* (Dignāga) : Ernst Steinkellner ed. 2005.

PVin = *Pramānaviniścaya* (Dharmakīrti) : Ernst Steinkellner ed. WZKS16, 199-206, 1972.

Y = *Pramāṇavārtikālamkāraṭīkā Suparīśuddhā* (Yamāri) : P 5723 : D 4226.

〈キーワード〉 Prajñākaragupta, śabdārtha, anyāpoha, arthakriyā

(龍谷大学大学院)